

[成果情報]台木品種の違いによるモモ「夢みずき」の生理落果量の比較

[要約]モモ「夢みずき」の生理落果量には台木品種が影響する。「ひだ国府紅しだれ」台は、除袋時の落果および除袋から収穫までの落果が他の台木より少ない。また、「おはつもも」台、「払子」台、「ひだ国府紅しだれ」台とも除袋後の落果は収穫始め前後に多くなる。

[担当]山梨県果樹試験場・栽培部・落葉果樹栽培科・上嶋幸輝

[分類]技術・参考

[課題の要請元]

峡東農務事務所、部門別農業代表者

[背景・ねらい]

モモ「夢みずき」は、品種特性として、収穫前の生理落果が多い。また、これまで枯死症対策として、凍害に強いとされる3種類の台木について、枯死の発生状況、生育に及ぼす影響などを調査し、「払子」台、「ひだ国府紅しだれ」台は枯死症の発生が少ないことを発表した(2019年度成果情報)。その後の継続調査で、「夢みずき」の生理落果には台木による差があることが確認された。そこで、台木の違いによる生理落果の発生程度を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 年次による変動はあるが、生理落果の量には台木品種間に差異が認められる。袋かけから除袋までの落果率は「おはつもも」台、「払子」台に比べ、「ひだ国府紅しだれ」台で少ない(図1、図2)。
2. 除袋～収穫までの落果率も「おはつもも」台、「払子」台に比べ、「ひだ国府紅しだれ」台で少ない(図1、図2)。
3. 3種類の台木とも除袋から収穫までの落果は収穫始め前後に多くなる(図3、図4)。

[成果の活用上の留意点]

1. 本試験は夢みずきの生理落果に対して台木の検討をしたもので、各品種の台木選定に際しては生産性や果実品質、枯死症の発生状況などを考慮する。
2. 「ひだ国府紅しだれ」台でも、強剪定の場合は生理落果が助長される恐れがあるので注意する。
3. 生理落果には剪定量や樹勢など台木以外にも助長要因が考えられるため、「夢みずきの栽培管理の手引き(山梨県オリジナル品種ブランド化推進会議)」の管理方法を遵守する。
4. 「ひだ国府紅しだれ」台は他の台木より樹冠面積が小さく、収穫量を確保するためには密植とすることが必要である。

[期待される効果]

台木の選択により、モモ「夢みずき」の生理落果対策の一助となり、生産量の増加が期待される。

[具体的データ]

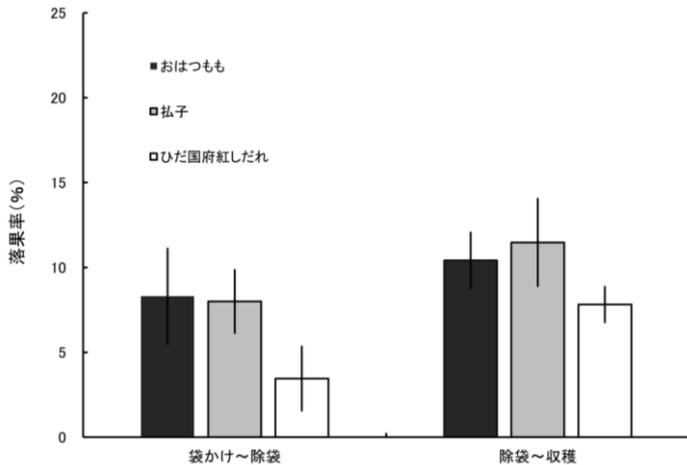


図1 台木別生理落果の比較 (2024年)
 値は供試樹(9年生)4~5本の平均、縦棒は標準誤差を示す
 1本あたりの着果数:おはつもも 300~610、払子 380~550、ひだ国府紅しだれ 308~340

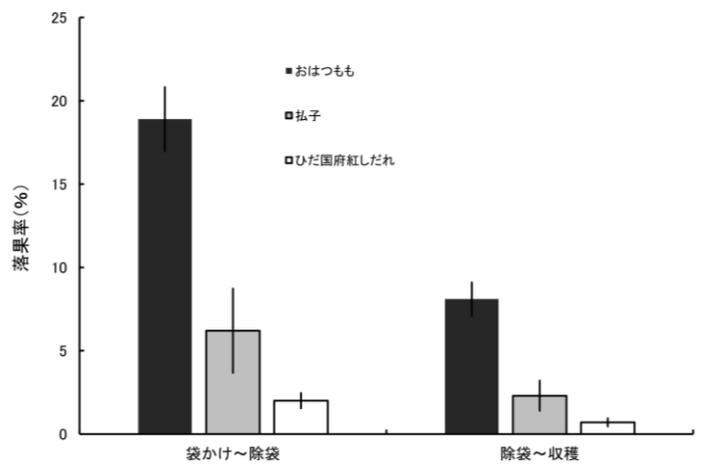


図2 台木別生理落果の比較 (2025年)
 値は供試樹(10年生)4~5本の平均、縦棒は標準誤差を示す
 1本あたりの着果数:おはつもも 229~795、払子 452~680、ひだ国府紅しだれ 350~470

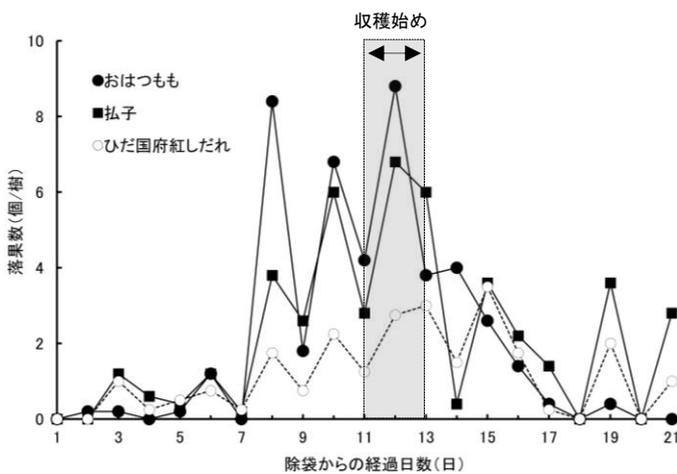


図3 除袋から収穫までの生理落果数の推移 (2024年)
 値は供試樹(9年生)4~5本の平均
 1本あたりの着果数(袋かけ枚数-除袋時落果数):
 おはつもも 300~610、払子 380~550、ひだ国府紅しだれ 308~340

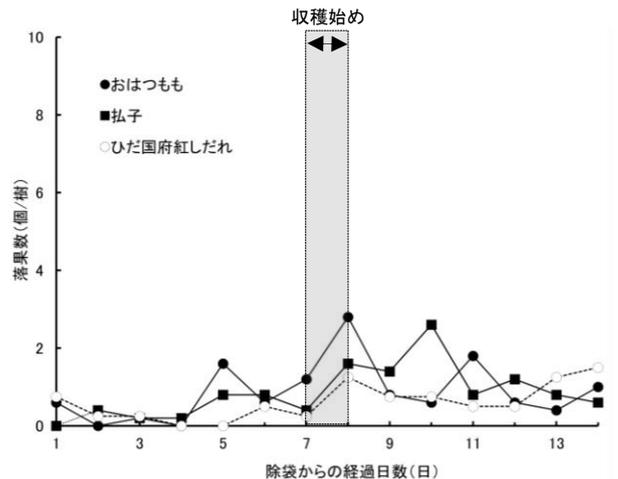


図4 除袋から収穫までの生理落果数の推移 (2025年)
 値は供試樹(10年生)4~5本の平均
 1本あたりの着果数(袋かけ枚数-除袋時落果数):
 おはつもも 201~612、払子 382~671、ひだ国府紅しだれ 348~459

[その他]

研究課題名: モモ枯死障害を軽減する胴枯病対策技術の確立(重点化)

モモ優良品種の特性調査と栽培技術の確立(第6次)

予算区分: 県単(重点化)、県単

研究期間: 2016~2021年度(重点化研究)、2022~2025年度(県単)

研究担当者: 上嶋幸輝、佐藤明子、富田 晃、小根山瑞葉、池田博彦、芦澤勇太、萩原栄揮